風ばか

豊島与志雄

一

——皆さんは、人間の身体は右と左とまったく同じだと、思っていますでしょう。右と左とにそれぞれ、眼が一つ、耳が一つ、鼻が半分、口が半分、手が一つ、足が一つ……。まんなかから切ってみると、右と左とは、まったく同じように見えます。ところが、よくしらべてみると、ずいぶんちがっています。いくら神様でも、生きた人間の身体を、右と左とまったく同じにこさえることは、おできにならなかったのでしょう。自分の顔やひとの顔を、よく見てごらんなさい。眼で

も耳でも、右と左では、その大きさや形がみなちがっています。右と左と同じなものは、けっしてありません。手なんか、大きさも長さもちがうし、力もちがいます。ことに、胸（むね）の中や腹（はら）の中になると、右と左とはひどくちがってるものです。それですから、たとえば、目かくしをして、広いところを、歩いてみてごらんなさい。けっしてまっすぐに歩けるものではありません。自然（しぜん）に、右か左かにまがってしまいます。人間は、どんなりっぱな身体（からだ）のひとでも、右と左とはかたわです……。

そういう話を、先生がなさいました。

なるほど、よく見ると、眼（め）でも耳でも、右と左とは同じ形ではありません。

おかしいな、と子供たちは思いました。

が、なおおかしいのは、目かくしをしてまっすぐに歩けないことでした。自分ではまっすぐに歩いてるつもりでも、いつのまにか少しずつ、右か左かへまがってしまいます。

「みんなかたわだ」

「なに、かたわなもんか」

「じゃあ、野原にいってやってみよう」

「ようし。みんなこいよ」

二

広いたいらな野原でした。春さきのことで、日がうららかにてっています。芝草（しばくさ）が青々とのびだしています。蝶（ちょう）がとんでいます。空には高く、雲雀（ひばり）がないています。

みんなでじゃんけんをして、勝（か）ったものが一番先（さき）に、ハンケチで目かくしをして、まっすぐに歩きだしました。ほかの者は立って見ています。

目かくしをした者は、まっすぐに歩いてるつもりで

すが、やがて、右か左かに少しずつまがっていきます。

それを見ると、みんなはわっとはやしたてました。けれど、笑った者もみな、自分の番になると、やはりまっすぐには歩けませんでした。

「こんどは僕だ、見ておれよ」

元気よくそういって、マサちゃんという子供が、目かくしをして、歩きだしました。

広い野原の中です。オイチニ、オイチニ……と調子をとってまっすぐに歩いていきます。

遠くなるにつれてだんだん小さく、帽子の下に白いハンケチの目かくしをしたその後姿が、まるで人形

のようで……そしてふしぎにも、まっすぐに歩いていきます。

だいぶ行ってから、くるりと向きなおって、目かくしを取って、

「どうだい」

見ていた子供たちは、はじめびっくりして、ぼんやりして、それから急に手をたたいてほめました。

マサちゃんはもどってきました。

「君たちは、ただまっすぐに歩こうとばかりしてるからだめだ。自分のくせを知って、練習しなくちゃいけないよ」

そこでみんなは、マサちゃんに教(おそ)わって、まっすぐに歩く練習(れんしゅう)をしました。まず、自分は右か左かに、どのくらいまがるくせがあるか、それをたしかめて、それから目かくしをした時は、それだけ逆(ぎゃく)にまがる気持(きもち)で歩(ある)く……。ところが、それがじっさいはひどくむずかしくて、なかなかうまくいきませんでした。

三

日が西にかたむいて、森のかげがうすぐらくなりはじめました。風がでてきました。

「今日はこれだけにしておこう。僕がも一度歩いてみせるから、よく見ておけよ」

マサちゃんは目かくしをして、さいごにも一度見せてやるというようすで、歩きだしました。

それが、どうしたのか、少しいってまがりだしました。

一かたまりになって見ていた者たちは、すぐに声をたてました。

「まがった、まがった……」

マサちゃんは目かくしを取りました。

「ほんとにまがったのかい」

「まがったとも。いばってたくせに、なーんだい」

マサちゃんはくやしがりました。そしてまたやりなおしましたが、やはりうまくいきません。

「ああわかった。風が吹いてるからいけないんだ。よし、こんどはうまくやってみせる」

　だんだんひどくなって、横から吹きつけてくる風を、マサちゃんは不平そうにながめて、それから決心して、目かくしをして歩きだしました。

　自分の足のくせと、横から吹いてくる風の力とを、マサちゃんは頭において、けんめいにまっすぐに歩こうとしました。風は時をおいてさーっと吹きつけて

きました。

――風にまけてなるものか。

マサちゃんは歯をくいしばって、進んでいきました。

「ばかー……」

おや、と思ったが、気のせいのようでした。けれど、またさーっと吹いてくる風が、顔をなでて、目かくしのハンケチの下の耳もとで、

「ばかー、ばかー……」

マサちゃんはがまんしました。

それでも風は、また吹きつけてきて、耳もとで声をたてました。

もうしんぼうができませんでした。いきなりどなり返(かえ)してやりました。

「ばか、ばかー」

風もどなりました。

「ばかー、ばかー」

マサちゃんも声をはりあげてどなりました。

「ばか、ばかー」

見ていた子供たちはびっくりしました。かけていって、マサちゃんをひきとめました。が、マサちゃんは、目かくしを取られても、風が吹(ふ)いてくると、その方へ向(む)いてどなりました。

「ばかー、ばかー」
みんな心配しました。マサちゃんが気狂になったのだと思いました。そしてむりに、家へ連れかえりました。途中でも、マサちゃんは風に向って、「ばか、ばかー」とどなっていました。

四

家にかえって、しずかな室の中におちつくと、マサちゃんはもうどなりもせず、夢からさめたように、きょとんとしていました。

お父さんとお母さんとが、心配そうにマサちゃんの様子をながめました。
「どうしたんですか」とお母さんがたずねました。
マサちゃんは、目かくしをしてまっすぐに、歩きっこをしたことを、話しました。それから風のこと――。
「風が、ばかー、ばかー――とわるくちをいうから、僕も、ばかー……といい返してやったんです」
お父さんは笑いました。
「それは、お前の方がばかだよ。風にさからってもつまらない。風というものは、強くなったり弱くなったり、息をついて吹くから、その中をまっすぐに歩くの

はむずかしいよ。木の葉だって、まっすぐに落ちたり、ななめに吹きとばされたりしてるじゃないか」

硝子戸の外には、まだ風が吹いていました。庭のすみにある椎の木の古葉が、一つ二つ散っていました。風に吹かれて横にとんでるかと思うと、風がちょっと息をする間、まっすぐに落ちます。かと思うと、またさーっと風がきて、葉はひらひらと吹きとばされます……。

「風って、息をするんですか」とマサちゃんはいいました。

「うむ、息をするよ。息をするというより、風は息な

んだよ」

「なんの息？」

「なんの息って……。どういったらいいかなあ、空気の息、神様の息、いろんなものの息……ただ息だよ」

「ただ、息だけ？」

「息だけだよ」

「ばかな奴だな」

お父さんは声たかく笑いました。マサちゃんもお母さんもいっしょに笑いました。

硝子戸の外には、椎の葉がときどき散っています。小鳥が鳴いています。夕方の赤い日が空にさしていま

す。そして風は、息をついてはさーッさーッと吹いています……。

「ばかな風だな」

マサちゃんはははればばれと笑いました。

底本：「天狗笑い」晶文社
１９７８（昭和53）年４月15日発行
入力：田中敬三
校正：川山隆
２００６年12月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。